

ファイナル

私の頭の中のまだエンピツ⑥

そだちと臨床研究会 川畑 隆

リスクを背負っている

第一場面

私は、対人援助職に就いたばかりの若手の人たちの研修会でこういう場面を体験しました。事例の資料を各自で読んでもらった後で、五、六人ずつのグループに分かれその事例について話し合ってもらおうとしたのですが、どのグループでもなかなか話し合いが始まりません。そのうち始まるだろうと思いだいぶ待ったのですが、待つのはここまですぐだと思えたタイミングでグループを解消し、全体会で一人ひとりに自分の意見を述べてもらおう形に改めました。すると、つまり講師の私との一対一の形を作ると、そこからはスムーズに各自が十分な意見を言えたのです。

グループでの話し合いでは進行役が指名されています。そういうことの影響もあったかもしれませんが、そのことだけでは説明できないくらい私にとっては思いがけない事態でした。自分の考えを回答として発表すること、その自分の考えを提出しながら横並びのコミュニケーションをとっていくこととの間には、少し距離があるのかもしれないと漠然と思いました。

第二場面

児童相談所の児童福祉司（ソーシャルワーカー）を対象とした研修会の講師を引き受けた時のことです。子どもの保護者役のロールプレイヤーと面接する場面を設定し、参加者の数名に交代でワーカーを演じてもらいました。そこでは、ワーカーから保護者への質問は繰り返されたものの、保護者の発言への返し、つまり「それはどういうことですか?」、「それはなぜ?」、「そこをもっと詳しく教えてください」というような「ツツコミ」が誰からもなかなか聴かれませんでした。

面接が保護者から事情を聴き取るような調査的なものだったこともあるのですが、まさにその調査項目にそって回答をただ収集していくような印象が強く、やりとりが深まっていかない物足りなさを感じました。

第三場面

第二場面を経験したこともあり、その後の児童福祉司研修（研修生は第二場面とは入れ替わっています）の機会に、次のような策をとりました。まず、児童虐待で通告された保護者への指導・支援的な面接を児童福祉司として行い、そこに質問や介入を多用してみるというロールプレイです。そしてその次に児童福祉司としてではなくその保護者と親しい友人として話し、同じように質問や介入を試みるロールプレイをお願いしました。そしてこの二つの面接のロールプレイを比較して、どこがどう違ったかを検討してもらおうことにしました。

第二場面でのツツコミの乏しさについては、ワーカーとしての業務上の制約というか配慮が行き過ぎているのではないかと思いました。つまり、述べたように「調査だ」という枠の捉えが強すぎたり、ツツコミによって個人情報をもっと詳しく聴き取ることに慎重になっている可能性をイメージしたのです。それで、第三場面では業務ではない「友だち関係」との比較をしてみることにしました。友だち関係のほうがツツコミやすければ、私の仮説に近づくように思ったのです。

ところがアテが大きく外れました。ほんどの人が「友だち関係のほうがツツコミにくかった」と述べたのです。私はそのアテの外れを告白しました。参加者は「友だちだからこそ気を遣って明らかにツツコミにくかった」らしく、私が先ほど述べたワーカーとしての業務上の気遣いについて尋ねると、あまりピンとはきていないようでした。

気遣いは友だちに対してのほうが強かったのです。それは第一場面の現象にも通じます。述べたようにワーカーとしてのツツコミは第二場面では乏しく、ツツコミを入れるようにと指示のあった第三場面では友だち関係よりは容易にしたがえていたようです。

もしかして、第二場面ではツツコミを入れようと思えば入れることができたけれど、そうは思わなかったというだけで、第三場面では「友だち」に対してほどには気遣いという人間関係的要素を差し挟まず、業務のノルマを果たせたということかもしれません。だとすると、そこからワーカーにとってのテーマを抽出するとしたら、「ラポール（親和関係）や気遣い」という人間関係的要素を伴いながら相手に踏み込むパワー」が必要だということになるでしょうか。そしてそのテーマが友だち関係のことにも通じるとしたら、人としてのパワーと言い替えてよいかもしれません。ただ私が

見たのは実際の面談ではなくロールプレイ場面でのことですから、その要因などが作用している可能性もありますが、私にとっては捨てておくにはもったいない現象でした。

リスクを背負っている

「話し合い」の必要性がどんな場面でも強調されますが、話し合いはある意味で危険な要素を含んでいます。相手と意見が異なった場合を例にとると、その時に相手と対立するか、相手に同調するか：どのように人間関係を維持するかというテーマです。いや、対立するかしないかの相手軸の○かー○○かの選択ではなく、本来は自分はどう思うかの自分軸が問われるのだと思います。しかしその解を自分の中に探すときに相手軸がかなり邪魔をしてきて、相手軸にとっても好ましい解を見つけないといけないかのように迫られる：つまり「リスクを背負う」ことになります。

対人援助職はこのリスクを背負う職業です。業務マニュアルさえあれば遂行できるというものではありませんし、無難な人間関係ばかりに頼っているのは支援にたどり着けません。ラポールがとりにくい事例が増える中でもラポールに支えられた共感・理解は重要ですが、相手と対立する場合もある介入・対決も含めた実のある交流を作り上げていく必要があります。

「実のある」とは（少し大層な物言いになってしまいかもしれませんが）、介入する側とされる側の分断ではなく、その介入が立場は違っても同じ時代を生きる者同士の交流となることを願っていることを指しています。

ただ、時代は「個人の保護と権利擁護」をとっても強く求めている、「個人情報」の開示や個人への介入」になるようなことは些細なことでも劣勢を

強いられています。そのような社会状況の中で、述べたような個人間交流場面の微妙なリスクよりもさらに大きな社会的リスク（不適切な対応やハラスメントなどの指摘）をも背負いながら、支援者は対象者のために必要な対応を行っていかねばなりません。

質問の意見性

質問は本来そのことについてわからないからするものだと思うのですが、国会質問のように質問を通して意見を述べるといふ側面があります。ある知事選候補者が相手からの質問に真正面からは応えず、逆に質問者に質問し返したり質問自体を批判したりしていることが「○○構文」として話題になりました。私はその候補者の態度が最初は快くありませんでしたが、私も「川畑さんはどう思いますか？」という質問に対して「あなたはどう思いますか？」と業務上の面接で対応していたことを思い出しました。それは質問者に自分で考えてもらおうという支援的意図があつてのことでしたが、相手はどう感じていたでしょうか。

たしかに質問には「愚問」もありますし、質問のための質問にすぎないものもあります。そして質問への回答もありきたりで、質疑応答のやりとり自体がその場をしのぐ以外の何物でもなかったりもします。そんなやりとりではなく、「そこで問題にしなければならぬ本質は何なのか」という問題提起を含む質問は、対人援助業務の中では重要な役割を持つように思います。